

(1) 内科系急性症状と発作

内科系の急性症状は、病を未病と発作に分けた場合には発作に分類される現象で、基本的に腹の邪毒や虚から頭に向かって邪気が衝き上げる「上衝」がある。頭に行く邪気を少なくすること、邪気に頭を衝かせないように体の外に引き出し、それによって上衝を鎮めることが基本的な処置になる。

上焦、中焦、下焦に歪みが少ないときは、邪気はそのまま表位に昇り急性症状を起こす。

上焦、中焦、下焦いずれかに歪みがあるときには、歪みのある所で急性症状を引き起こすので、表位の症状はその分だけ軽くなる。

(2) 表位の急性症状

表位の急性症状では、既に頭に邪気が上がっているの、顔頭始め肩甲骨・鎖骨から上の表位に、熱や痛みを始めとする色々な症状が出ている。表位の症状が目立つときは、上中下焦の歪みは比較的少ない。

基本処置は、既に頭に上がっている邪気を減らすこと、邪気を体の外に引き出すこと。手足末端の引き鍼と表位の散鍼が、主な手段。

手早い刺鍼が大切で、邪気の波が来終わったときに抜鍼するのがコツ。次の波が来てしまうと、また、上衝が起き、症状が復活する。

(3) 実技と手順

姿勢は、基本的には、座位が望ましい。寝て刺鍼したときは、起きあがったときに症状が復活しやすいから。症状が復活したら、座位でまた表位に散鍼してから手甲に引き鍼。

〈1〉急性期の応急処置

手順の基本は、次の通り。

1. 上衝をおさめる：手甲に引き鍼

2. 上衝をおさめる i. 表位の散鍼

ii. 手甲に引き鍼

途中で状況により必要な処置を付け加える。

1. 上衝をおさめる：手甲に引き鍼

先ず頭に上がった邪気を少しでも降ろすために、手甲のツボに引き鍼。カゼによる発熱、熱中症など前頭部が熱いとき、口唇ヘルペスの場合には、1-2間の合谷に引く。眩暈、偏頭痛、耳鳴りなど耳や内耳の平衡器官が関係している場合には、4-5間の中渚に引く。頭の高チマキをする辺りを触って一番熱い所と経絡的（前・横・後ろ）に関連する

手甲のツボを選んでよい。それぞれ隣の指に出ることもある。

瞬き、顔の赤み、声のトーンなどを参考に上衝が治まるように刺鍼。刺法は、速刺除抜。邪気を感じたり、瞬きが始まったりしたら、深さを変えずに、抜く方向に力を加えながら、横揺らし、旋捻などをして、来ている邪気を全て外に引き出すように刺鍼。邪気の波が来終わったときに抜くのがコツ。カゼで熱のあるときや二日酔いのときに練習すると、身に付きやすい。

手甲のツボで表位の症状が治まりきらない場合には、井穴など手の指を使ったり、足陽経の足三里や陽陵泉を使う。手の指のツボを使うときに痛がられるようなら接触鍼。

症状の出ている所の背中側にツボが出ていれば、陽に引くのもよい。即刺徐抜。

2. 上衝をおさめる

i. 表位の散鍼

表位の熱い所を散鍼。手順は、先ずは肩胛骨・肩の周り、項（うなじ）、次に鎖骨～前頸部、そして頭・額。

ii. 手甲に引き鍼

一番悪そうな手甲のツボに刺鍼。引ききれないときには、2,3番目にも引き鍼。

〈2〉灸

手指の骨空や井穴に糸状灸するだけでよいことも多い。選ぶ指は鍼のときと同じ。

〈3〉疔の虫

疔の虫は、手の拇指や示指の井穴を挟んで痛くすると、治まることが多い。

〈☆〉数時間以内に復活したら

応急処置後数時間以内に痛みが同じくらい復活したら、器質性病変を疑い救急医療へ。

要点

- ① 表位の急性期は、頭に邪気が衝き上げている
- ② 表位の急性症状は、先ず、合谷などに引く
- ③ 直ぐに痛みが復活したら、救急医療と連携